

No.17 戦後文学を読む

－学生運動に関連して－

■講座内容

大地震、原発事故、ルサンチマンを抱えた為政者の台頭、テロリズムの簇生……、と乱世です。二〇世紀最大の乱世は世界大戦の頃でしょうが、日本の戦後文学は、その衝撃を内面化して苦闘しました。その後、経済復興やら平和主義などの建前のもと時代は進んでいったように見えます。しかし、見て見ぬふりをした事柄は必ず表にでてきます。暴力を伴った運動もいくつか現れました。学生運動もその一つです。それらを文学はどのように描いたのでしょうか。円地文子「食卓のない家」、大江健三郎「洪水はわが魂に及び」、三田誠広「漂流記 1972」、立松和平「光の雨」などを参考にしながら、考えてみたいと思います。

■開講日時 12月6日(火)～1月10日(火)(全4回)

■担当講師 渡邊 史郎(香川大学教育学部准教授)

■募集人員 30人

■受講対象 一般成人

■会場 香川大学生涯学習教育研究センター

■受講料 6,000円

■受付締切 11月28日(月)

回	月 日	時 間	テーマ
1	12月 6日(火)	10:00 ～ 12:00	はじめに ー円地文子「食卓のない家」
2	12月13日(火)		大江健三郎「洪水はわが魂に及び」
3	12月20日(火)		三田誠広「漂流記 1972」
4	1月10日(火)		終わりに ー立松和平「光の雨」